

Q 住みやすい街と そうじゃない街の差は?



「あらゆる人々が
いきいきと生活できる
“都市構造”か
どうかが重要です」

あらゆる人にとって
住みやすい
都市構造を研究。

愛知県もそうですが、これまで日本の都市は人口が増えていたため、居住地や商業地が郊外へ拡大し、車で移動する生活スタイルが定着してきました。しかし、そのような方々が年齢を重ね、子どもが独立して老夫婦だけになると、買い物や通院等の移動に不自由を感じる方も多いです。最近、高齢者に関する交通事故が増加していますが、これも車に頼らざるを得ない生活スタイルと深く関係しています。都市に住むあらゆる人々が安心・快適にいきいきと生活できる都市構造の実現が私のめざすところ。その取り組みのひとつが、生活の利便性を視覚化することです。

「アクセシビリティ」を
視覚化し、実際の
都市計画に反映。

住みやすい都市構造を実現するために、駅や商業施設、病院までの行きやすさ（アクセシビリティ）を数値化し、居住地の生活利便性を評価しています。評価結果はGIS（地理情報システム）と呼ばれるソフトを使って、コンピュータ上で視覚化します。不便な地域があれば、行政機関等と連携しながら対策につなげています。このような手法は子育て世帯の待機児童問題にも活かせます。以前、名古屋市の保育所アクセシビリティを調査したところ、緑区の特定の地域で保育施設が不足していることが判明。そこに保育施設を建てることで効率的に需要と供給の空間的なミスマッチを解消できます。今まで人々が生活の実感として感じていた住みにくさなどを視覚化することで、実際の都市計画に効果的な対策を反映し、誰もが快適に暮らせるまちづくりの実現に貢献していきたいですね。



PROFILE

鈴木 温 先生

先生いわく、「小学生の頃から地図帳が好きで、夏休みの自由研究で立体地図を作ったり、自分の家の模型を作っていました」と今につながるエピソードも。大学院のときに参加した学会で研究の面白さに目覚め、研究者になることを決意されたそうです。



私の学生時代

スポーツ中心だった
学生時代。

中学1年から大学4年までの約10年、陸上競技を続けていたので、学生時代は部活中心の生活。授業が終わるとすぐにグラウンドに直行していました。大学院進学後は、陸上競技をスパッとやめ、研究一筋の生活に。興味を持ったことに、とことんのめりこむ性格です。

